

おくすり Q&A

アナフィラキシーの薬、注射以外にもあるの？

2026年2月、アナフィラキシー反応の治療に使われる新しい薬、ネフィー®点鼻液(有効成分：アドレナリン)が発売されました。このお薬は、アナフィラキシーの既往のある方、またはアナフィラキシーを起こす危険性が高い方に限り、蜂毒、食物及び薬物などが原因で起こるアナフィラキシー反応に使用できます。



Q. アナフィラキシーって何？

A. アナフィラキシーは、蜂毒・食べ物・薬などが原因で、短時間のうちに全身に強いアレルギー反応が起こる状態です。主な症状には次のようなものがあります。

- ・息苦しさ、ゼーゼーする
- ・のどの違和感、声がかすれる
- ・全身のじんましん、赤み
- ・めまい、意識が遠のく

放置すると命に関わるため、**迷わず対応することが大切です。**



Q. 治療にはどんな薬がありますか？

A. アナフィラキシー治療で最も重要な有効成分は**アドレナリン**です。アドレナリンは気道を広げたり、血圧を保ったりすることで命を守る働きがあります。現在、医師から処方され、患者さん自身が使えるアドレナリン薬は主に2種類あります。

① エピペン®注射

太ももに打つ自己注射薬です。



特 徴:長年使われてきた実績があり、注射薬なので薬の効きが早いです。

保育士・教職員・救急救命士の方が患者さんに代わって投与できます。

注意点:注射に抵抗を感じる方がいます。そのため正しい使い方の練習が必要です。

② ネフィー®点鼻液

鼻に噴霧する新しいタイプの薬です。

特 徴:注射ではないため、注射が苦手な方や小児にも使いやすいお薬です。

鼻からの投与になるため、注射に比べ扱いやすいです。

注意点:点鼻薬のため鼻の粘膜に異常がある場合は使用に適さないことがあります。

現時点では、保育士・教職員・救急救命士の方が、患者さんに代わってネフィー®点鼻液を使用できるという見解は示されておりません。

(4月16日付で保育士・教職員の使用は認められました。)

※①②どちらの薬を使用するかは、年齢・体重・症状・生活環境などを考慮して医師が判断します。



Q. アドレナリン薬を使った後はどうすればいいですか？

A. 薬を使用した後はすぐに救急搬送を要請し、使用した薬を持参したうえで医師の診察を受けてください。症状が一時的に軽くなった場合でも、必ず医療機関での確認が必要です。



アナフィラキシーは、「早く、迷わず薬を使うこと」が命を守る最も重要なポイントです。ネフィー®点鼻液は、注射が苦手な方でも使いやすく、生活に合わせて選べる新しい選択肢です。処方されたアドレナリン薬は常に携帯し、**使い方を定期的に確認**しておきましょう。

執筆薬剤師 棕澤 慎太郎

わたしの健康とくすり

第363号



今月の内容

- ・疾患シリーズ アトピー性皮膚炎とは(その4) ~ JAK 阻害薬と新しい外用薬~
- ・ちょっとお耳を…… ぽかぽか春こそ要注意? お弁当の食中毒予防
- ・おくすり Q & A アナフィラキシーの薬、注射以外にもあるの?

2026年4月発行

発行者 八王子薬剤センター 橘 隆二
東京都八王子市館町 1097 電話 042-666-0931

協力 八王子薬剤師会

疾患シリーズ アトピー性皮膚炎とは(その4) ～ JAK 阻害薬と新しい外用薬～

◎ JAK 阻害薬と新しい外用薬について

これまで、アトピー性皮膚炎の治療として、ステロイド外用薬(その1)、生物学的製剤(その2)についてご紹介してきました。近年はさらに治療の選択肢が広がり、**内服薬である JAK 阻害薬**や、**ステロイド以外の新しい外用薬**が使用できるようになっています。今回は、これらの比較的新しい治療について解説します。

◎ JAK 阻害薬とは？

JAK 阻害薬は、アトピー性皮膚炎の炎症やかゆみの信号を体の中で伝える「JAK(ヤヌスキナーゼ)」という酵素の働きを抑える内服薬です。炎症に関わる複数の物質の働きを同時に抑えるため、**かゆみの改善が比較的早く感じられる**ことが特徴とされています。

現在、アトピー性皮膚炎に使用されている JAK 阻害薬には、リンヴォック®(ウパダシチニブ)、オルミエント®(バリシチニブ)、サイバインコ®(アプロシチニブ)などがあります。いずれも、ステロイド外用薬などの既存治療で十分な効果が得られない中等症から重症の患者さんが対象です。

1日1回の内服で治療できるため、注射に抵抗がある方でも取り入れやすく、治療を続けることで**症状が落ち着き、日常生活に支障が出にくい、寛解に近い状態**を目指すことができます。一方で、定期的な血液検査などの管理が必要な薬でもあるため、医師の指示に従った治療が重要です。

◎ 新しい外用薬について

近年は、ステロイド外用薬とは異なる作用機序をもつ**新しい外用薬**も登場しています。これらは、炎症の原因となる物質の働きを抑えることで、皮膚の炎症やかゆみを改善します。

代表的なものとして、モイゼルト軟膏®(ジファミラスト)やコレクチム軟膏®(デルゴシチニブ)があり、乳幼児を含む小児にも使用できる点が特徴です。また、タピナロフ®(ピタマー)は1日1回の塗布で治療が可能な外用薬として注目されています。これらの新規外用薬は、ステロイド外用薬が使いにくい部位や、長期使用に不安を感じる場合に選択されることがあります。外用治療を継続することで、**皮疹が目立たない状態**が続き、**寛解に近い状態**を維持できる方もいます。



アトピー性皮膚炎の治療は、症状の程度や年齢、生活スタイルに応じてさまざまな選択をできる時代になっています。どの治療にもメリットと注意点がありますので、医師や薬剤師と相談しながら、ご自身に合った治療を見つけ、無理なく続けていきましょう。



ちょっとお耳を……

ぼかぼか春こそ要注意？ お弁当の食中毒予防



4月は進学や就職など、待ちに待った新生活がスタートする時期です！一人暮らしやお花見などの行事で「お弁当」を作る機会も増えるのではないのでしょうか。私たち薬剤師は、お薬のことだけでなく、地域の皆様の日常の健康や衛生管理をサポートすることも大切な役割だと考えています。今回は、この時期にぜひ見直していただきたい「**春の食品衛生とお弁当作り**」について、お話ししていきます。



■ 意外と知らない？ 「春」の食中毒

食中毒というジメジメした梅雨や真夏をイメージしがちですが、実は気温が高くなり始める**4月・5月も要注意**です。近年、4月の平均気温は上昇傾向にあり、お弁当箱の中は細菌が繁殖しやすい「**温かく、湿気がある環境**」になりがちです。さらに、新しい環境による疲れから**免疫力が落ちやすい時期**でもあり、普段なら問題にならない、わずかな細菌でもおなかの調子を崩してしまう可能性があります。



■ 食中毒予防の三原則

そこで意識したいのが、衛生管理の基本である、細菌を「**つけない**」、「**やっつける**」、「**ふやさない**」、の三原則です！

1. つくる前「**つけない**」

調理前はもちろん、生肉や生魚を触った後は手を洗いましょう！おにぎりは素手で握らず、**ラップや手袋を使う**と衛生的です。



2. つくるとき「**やっつける**」

食材は中心部まで加熱することが大事です。前日の残り物をつめるときも、そのまま入れず、必ず「**再加熱**」して細菌をやっつけましょう！



3. つめるとき・保存するとき「**ふやさない**」

細菌は温かい環境で活発に増殖します。持ち運びの際は、保冷剤を活用して**温度を上げない**工夫が大切です。



■ お弁当ならではの工夫

お弁当の衛生で特に気を付けたいのが「**水分**」です。お弁当の汁気は細菌の増殖の原因となり食材が傷みやすくなります。煮物などはしっかり汁気を切り、水分の少ない揚げ物や焼き物を使用することも効果的です。また、お弁当が温かいま蓋をしまうと、蒸気が水分となり、傷みの原因となってしまいます。必ず**冷めてから蓋**をするようにしましょう！

衛生的なお弁当は、ご自身やご家族の健康を守る第一歩です。おいしい食事だけでなく栄養を取り、新しい季節を元気にお過ごしください！健康や衛生面で気になることがあればいつでもお近くの薬局へお気軽にご相談ください。お待ちしております！